

## 110周年記念誌発行 「森林総合研究所百年のあゆみ」

森林総合研究所は、2015年（平成27年）11月1日に110周年を迎え記念行事を行い、その記念行事の一環として、110周年記念誌「森林総合研究所百年のあゆみ」を発行し、創立100周年以降の10年間についての足跡をとりまとめました。

内容は次のとおりです。

- (I) 森林総合研究所100～110年の沿革
- (II) 研究開発部門の動向
- (III) 育種部門の動向
- (IV) 森林保険部門の動向
- (V) 森林整備部門の動向
- (VI) 総合的研究の動向と成果
- (VII) 付図・付表

「百年のあゆみ」は、森林総合研究所の活動を社会に「より広く」「より強く」発信することを目的としてインターネットで配信しています。森林総研ホームページから、記念誌とCDジャケットをダウンロードできます。

<https://www.ffpri.affrc.go.jp/pubs/ayumi/110ayumi/index.html>



記念誌CDジャケット(表・裏)

## nano tech 2016 大賞 新人賞受賞

平成28年1月27～29日に東京ビッグサイトで開催されたnano tech 2016（第15回 国際ナノテクノロジー総合展・技術会議）において、当所がnano tech 2016大賞 新人賞を受賞しました。

nano techは約600の企業・団体が出展するナノテクノロジーに関する世界最大級のイベントで、当所は「国産材を原料としたセルロースナノファイバーの製造実証―酵素加水分解と機械処理によるナノ化―」について出展し、多くの来場者に来ていただきました。

nano tech 2016大賞 新人賞は本展示会の新規出展者の中から、斬新かつ先駆的な技術・製品を表彰するもので、

次世代素材のセルロースナノファイバーの製造技術を開発、日本に豊富にある木材の有効活用に貢献するとして高く評価されました。



授賞式の様子



展示ブースの様子

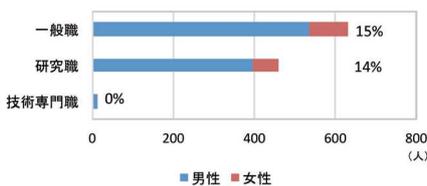
## 女性活躍推進法に基づく 行動計画の策定

森林総合研究所は、女性活躍推進法に基づく行動計画として、公正な選考に基づき女性職員を一定率以上採用するための数値目標と将来の女性管理職の比率を高める数値目標を策定しました。これは、全職員および管理職における女性割合が低い現状を改善し、女性の一層の活躍を図るためのものです。これと併せ、男性の育児休業取得促進に関して、職種にかかわらず育児休業取得者を増やすことを目標に定めました。これは、すでに次世代育成支援行動計画で定めています。これまで研究職の取得実績は多いものの、一般職の取得が少ないことを改善するためです。

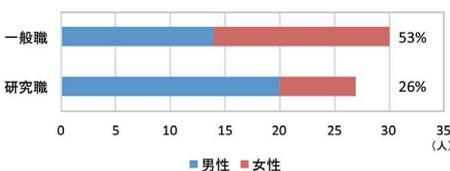
当研究所に働く一人一人の女性が、その個性と能力を十分に発揮できる職場を目指し、本行動計画の推進に取り組んでまいります。

**【計画期間】** 平成28年4月1日～平成33年3月31日  
**【目標1】** 採用者に占める女性割合を30%以上にする。  
**【目標2】** 管理職に占める女性割合を7%以上にする。  
**【目標3】** 職種にかかわらず育児休業を取得しやすいよう、職場環境の整備をはかる。

常勤職員に占める女性割合(28.4.1)



採用者に占める女性割合  
(平成27年度採用者)



## 国際森林デー シンポジウム 「COP21パリ協定が求める森林のすがた」

2012年12月に開催された国連総会において、毎年3月21日を「国際森林デー」とすることが決議され、森林総研ではこれにあわせて関連する研究集会を開催してきました。今年度は、3月18日(金)に早稲田大学小野記念講堂において「COP21パリ協定が求める森林のすがた」と題して、パリで開催されたCOP21の論点を5名の論者に解説していただきました。シンポジウムでは、林野庁沖修司次長にご挨拶いただき、パリ協定における森林の位置づけ(森林総研・松本光朗)、国際的な取組の中で日本の立場(JICA・五関一博氏)、温暖化対策におけるREDDプラスの現状と予測(森林総研・恒次祐子)、温暖化対策の新しい手法としてのBECCSの可能性(信州大学・高橋伸英氏)が報告されました。当日は151名の参加者があり、REDDプラスの推進とセーフガードにおける日本の立場、木材利用による排出削減シミュレーション、BECCSの実現可能性等について熱心な討議が行われました。



パネルディスカッション



登壇者の記念写真  
(沖林野庁次長:左から4人目、沢田理事長:左から5人目)

## シンポジウム「前進する北の林業」を開催

「先進林業機械を利用した安全で低コストな林業」をテーマに、2月16日(火)、札幌コンベンションセンター(札幌市白石区)でシンポジウムを開催しました。講演では北海道支所と下川町が共同開発した、林内走行型機械を用いた短幹集材(CTL)、クラッシュヤ地拾え、コンテナ苗の活用、低密度植栽等を組み合わせた伐採・造林一貫システムについて、その具体的技術、コスト評価、および環境影響の三つの点から研究担当者が講演し、機械をフルに活用することが生産性やコストの点から有利であることが示されました。

また、機械化林業の先進地であるフィンランドとスウェーデンの研究者による、伐採作業や苗木生産・造林作業の機械化に関する講演や、下川町や林野庁といった行政サイドからも低コスト林業や伐採・造林一貫作業の必要性や期待について講演がなされました。講演者全員と司会者によるパネルディスカッションでは、開発されたシステムを適用する際の地形の影響や環境インパクト、地域振興に対する林業の役割等、様々な角度から意見交換が行われました。用意した会場は約250名の参加者により満席で、このテーマに関する関心の高さがうかがわれました。



講演の様子



パネルディスカッション

編集委員：小泉透 河原孝行 市田憲(NPO法人才の木) 宮本基杖 宮俊輔 大沼清仁 河野裕之 齋藤英樹 松永正弘 中村充博